

君が望む永遠 二次創作

君がかえるシアワセ

有栖山 葡萄



有栖山書房

店舗の裏手、事務所に男が二人。

「細かいところは明日処理するので、先ほどの所までは終わらせておいてください。それじゃ、お願いします」

彼はマネージャに指示を出し終わると、本社向けの書類を鞆に突っ込み帰り支度をする。

「しかし、鳴海店長は相変わらず恐妻家ですね。奥さん、水月さんって云いましたっけ？ 今日もまた一緒にどこかに出かけられるんですか？」

マネージャから、鳴海にそんな声がかげられる。鳴海は彼に、今日は早上がりをすると言前に話していた。

鳴海が週に一度早めに帰るときの理由を「妻のご機嫌伺い」という風に軽く言っていたら、どうやら定着してしまったようだ。鳴海とマネージャはそう離れていない年齢だが、マネージャはまだ独身なのでそのあたりが判らないようだった。

「いつもどおりだよ。円満な家庭生活は勤勉な奉仕に秘訣があるというのが、俺の親父からの教えだね」

鳴海の言葉にマネージャは苦笑いを返す。

「ははっ。そんな話聞いたら、結婚についても一度考え直したくなりますよ」

彼自身も彼女とそろそろ結婚をと話が出ているらしく、どう

にも他の家庭の様子に興味は尽きないようだった。

「奥さんってかなり強気な女性なんですか？」

鳴海の家庭が特別なんだろうかとおもったらしい。

「そうだな。確かに水月は学生時代『ぶっ飛ばすわよ』なんていいながら、先に手が出たな。そういや、ソフトボールぶつけられたりもしたなあ」

なんとなく懐かしそうに回想する鳴海に、彼が哀れみの視線を向ける。

「それって、家庭内暴力とかEDとかかってやつですか？」

「いや、それは学生時代の話だよ。結婚してからは、よく尽くしてくれてるよ。子供が出来てからは、なおのこと良くしてくれてるよ。それと、家庭内暴力を言うならEDじゃなくてDVだよ」

今度は鳴海が苦笑する番だった。

「あー、そうともいいますね。ははっ」

笑って誤魔化す彼に「とまあ結婚生活も、そんなに悪いもんじゃないさ」と軽く応える。

「了解しました。では、愛しの奥さんと楽しんできてください。じゃあ、後はやるとききますんで。おつかれさまです」

「ああ、よろしく頼む。それじゃ明日」

鳴海は挨拶を済ませ事務所から店の裏口を出、一番端にとめてある車に乗り込む。

環状二号線にあるロードサイド型店舗に配属になって通勤が不便だということで、一年前にローンで買った中古車。子供をつれて出かけるにも便利で何かと重宝していた。それにガソリン代は会社から交通費として経費扱いになっているし、そのあたりは助かっていた。

彼はエンジンをかけ、ハンドルを握り移動を始める。

視界に時計を捉え時間を確認する。十八時少し前。

約束の時間までは三十分ある。夕刻とはいえ、普通に行けば十分にゆとりのある時間だ。

しかし、しばらく順調に進んだと思ったら、抜けるべき幹線道路は車線規制で徐行運転になっていた。緊急道路工事実施中と看板が見え、その影響の渋滞だと判る。

しばらく続く徐行運転にもう一度時計を見ると、待ち合わせ時刻には間に合いそうに無いことは確実だった。

携帯を手に記憶している数字を十一桁押し、最後に発信ボタンを押す。プッププツツという契約キャリア独特の発信音が聞こえ、その後に呼び出し音が続く。数回の呼び出し音の後に接続し、電話の向こうの声が聞こえる。

「もしもし、どうしたの？」

「悪い。渋滞にはまって、十分くらい遅れそうだ。先に店にはいつて待っていてくれてもいいけど、どうする？」

携帯電話を片手に、前方の渋滞に目を向ける。車線規制されている部分が終わるところまで、さほど距離は残っていないかった。たぶん今言った以上の遅れになる事は無いだろう。

「うんわかった、先に入ってるね。急いで事故とか起こさないように安全運転だね」

「ああ、気をつけるよ」

「うん、また後で」

手にした携帯で、続いてメールを打つ。徐行運転をしながらキーを打ち、送信完了の文字を確認して、助手席に放り投げる。鳴海が前を見ると、ちょうど工事区間を抜け車線が広がった。彼は腰をあげ座り直しハンドルを握ると少し深めにアクセルを踏み込んだ。独特のノイズと加速感を伴いながら車は速度を上げていく。

先ほどまでの渋滞の影響は無くなり、むしろ流れがよくなっている。今のペースで走り続けられ、むしろ遅れるどころか予定より早くつきそうな感じだ。

彼はそのまましばらく車を走らせる。

彼女の居る場所へ向う見慣れた景色が、次々に後ろへと流れていく。

通い慣れた道。

浅間下交差点に差し掛かり、彼はウインカーを出し車を左車線に寄せる。

後二つ角を曲がれば、彼女との待ち合わせの場所だ。

## 目次

序章 ◎ 狭間の刻——04

一章 ◎ 手にしたシアワセ——08

二章 ◎ もう一つのシアワセ——14

三章 ◎ 誘い——18

四章 ◎ 夕闇に現れた彼女——26

五章 ◎ シアワセの狭間——29

六章 ◎ 明かされた関係——32

終章 ◎ 君がかえるシアワセ——40

余文 ◎ すごく短いあとがき——42

——  
おかえりなさい、  
孝之……

君が望む永遠 小説

三年前。

「生まれましたよ、おめでとうございます」

入籍をして半年経ったある日、鳴海孝之は病院にいた。

分娩台の上に、水月が横たわっている。疲れた様子だが、満足そうな笑みを浮かべていた。

分娩室には今この世に生を受けたばかりの赤子が、小さな体からは想像も出来ないような大きな産声を上げている。

「二千九百グラム。元気な、男の子ですよ」

泣いている赤子を抱き上げていた看護婦が、身体についた汚れを優しくふき取る。そして水月に手の当て方を教え、赤子を手渡す。

彼女は、初めて抱いた我が子を見つめる。

「よろしくね。全部初めてなママだけど、頑張るからね」

水月はずっと、子供を見ていた。

「おめでとうございます、お父さん」

孝之は、看護婦から声をかけられ「ありがとうございます」と答える。出産を見たショックで呆然とする男性は多いらしく、彼の反応もそれに近かった。

孝之は、幸せに包まれた妻と我が子を少し離れたところから見ていた。

妊娠中は大きなトラブルはなく、自然分娩で無事に出産。担当医師が「こんなにスムーズなのは久しぶりだ」と驚くほどの順調だった。それでも三時間近く陣痛に苦しんでいたのだから、出産の大変さは計り知れない。

水月は検査の後病室に戻るらしく、新生児も別の部屋に連れていかれるらしい。説明を受けた孝之は、病院内で少し時間を潰す事にした。

産科のある病院は年々減っており、病院選びが一番難航した。孝之も水月も初めての出産という事で少し神経質になっていたが、評判と親戚の推薦もあつて櫛総合病院に入院する事となった。

二人にとつてあまり良い思い出のある場所ではないが、ある意味よく知った場所だった。始めは別のところにしようと考えていたが、結局この病院となった。

孝之は慣れた様子で院内を歩く。あれから数年経って、見知った顔に出会うことはなかった。

彼の足は、自然と屋上へと向っていた。カチャン、キイイと金属の軋む音と共に扉が外に開かれる。

真っ白なシートが干されているのが目にはいる。

天を仰ぐと照りつける太陽と真っ青な空が、病院内の陰鬱と

した空気から開放してくれた。

孝之はフェンスに近寄り、眼下に見える病院の敷地に視線を落とす。真っ白な砂浜と蒼い海、太陽に煌めく波頭。海辺の病院で屋上から眺める海岸は、海水浴客も居らず静かに波で洗われていた。潮の香りと潮騒が、吹き上げてくる風に乗って運ばれる。穏やかな風景。

「懐かしい、眺めだな」

孝之は様々なことを思い出しながら、ぼんやりと景色を眺めていた。背後の扉が開いた音が聞こえた気がしたが、洗濯を取り込みに来た看護婦だろうと別段視線を向けもしなかった。

「うちの看護婦が、あなたの事を探してるわよ。鳴海君」

かけられた声に、孝之は振り向く。タバコを啜えライターを手にしている白衣を着た女医。懐かしい顔だった。

「お久しぶりです、香月先生」

「お久しぶり、鳴海君。長男出産おめでとう」

香月は笑顔で、お祝いの言葉をいう。

「ありがとうございます。でも、どうしてそれを？」

櫛病院は総合病院としてかなりの規模だ。科が違えば、一般的な患者なら誰が居るかわからなくても当たり前だ。

「たまたまね。私は結構あちこちの科と連携して動く事が多いから。産科の入院患者と今日の出産予定に『鳴海水月』って書いてあるのをみて、あなた達の事だつて分かったのよ」

なんでもないことだというように、さらりと言うと煙草に火

をつける。しばらく無言が続く。

「先生……」

ようやくかけた言葉を、孝之は詰まらせる。その先を続けていいものか、悩んでしまった。聞きたかったのは、彼が去った後の病院での出来事。孝之が見捨ててしまった、ある患者の事。「私から言う事は何も無いわ」

突き放すでもない、怨恨でもない。全てを悟った声で、香月が続ける。

「あなた達に、何があつたかは聞かない。ただ私に言える事は、生まれてきた命とそれを育む命、これからはその二つを大切にしてください」

静かに、優しく孝之に諭す声。昔も幾度かこの声に救われた事があつた、教えられた事があつた。

「そうですね、努力します」

孝之はそういうと、香月に視線を向けた。彼女は煙を吸い込むと、一気に吐き出した。そして携帯灰皿に吸殻を突っ込むと、無造作に白衣のポケットにしまいこむ。

「ま、病気で困った事があつたらいつでもいらっしやい。医者が手伝えるのは、そのくらいよ」

彼女が孝之を見て、微笑む。

「お気遣いありがとうございます」

「さて、私も休憩終り。戻りましょうか」

「ええ、そうします」